

キーワード

劇場、能楽堂、能舞台、演劇改良、満洲

Theater, Noh Theater, Noh Stage, Theatrical Reform, Manchuria

研究内容

[1] 近代能楽堂の形成過程の解明

- ・元々、能は宮殿や屋敷の庭、神社の境内などに能舞台を配置し、野天を挟んで観能していた。
- ・屋外に能舞台を配した観能空間が、如何に西洋のオペラ・ハウスのように劇場化したのかを解明するのが本研究の課題である。
- ・能楽堂は近代に成立した建築類型で、西洋化へ邁進したい明治期の国家意識が反映されたものである。
- ・能楽堂の平面構成は、観覧席が能舞台を三方から囲み偏心しているが、これは前近代の勧進能場や武家式楽の演能場からの伝統的配置である。
- ・能楽堂の変遷における重要な着目点は、野天を完全に室内化したことであり、それに伴い大空間を包容する構造の成立が必要であった。また、こうした変遷の背景には、演劇改良から派生した能楽改良の隆盛があった。
- ・能楽堂類型の成立過程は、能楽堂に限らず、華族邸宅の能楽御覧所、博覧会の能楽場などの複合的な系譜から構成されている。
- ・能楽堂を形成させた系譜の一つである華族邸宅の能楽御覧所では、天皇行幸との関連が強く、これは前近代の将軍御成の演能空間を模範とした。
- ・能楽堂で完全に室内化を達成した最初の事例は、宮廷建築家の片山東熊が設計した宮中能楽場があげられ、観覧席は敷席から椅子席へと変化している。
- ・能楽堂は、近代日本の国家を表象する建築類型であり、その成立の背景には、伝統保持と西洋文化導入の衝突と融合の過程があった。



旧染井能舞台（横浜能楽堂内）

[2] 明治期の満洲建築調査の現代的意義の解明

- ・明治期の建築界が行った満洲調査は、その後の進化主義や伝統様式の継承などに大きな影響をもたらした。
- ・本調査は、伊東忠太、大江新太郎、大熊喜邦、佐野利器が1905年8月から3ヶ月間に渡って行った満洲調査が主な対象である。
- ・調査後に、伊東忠太が「満洲の仏塔」、「満洲の仏寺建築」、大江新太郎が「満洲に於ける建築装飾に就て」、大熊喜邦が「満洲の住宅」、「満洲の劇場」、佐野利器が「満洲旅行談」を発表した。
- ・調査関連の論文は、日本人による初めての現地調査に基づく満洲建築研究である。
- ・伊東忠太の中国建築調査では、「日本建築の根源・ルーツ探し」に関心が強いが、本調査では「満洲族建築の歴史研究」を中心である。
- ・伊東忠太は仏教建築、大江新太郎は装飾、大熊喜邦は住宅を調査対象にしたことから、明治期の日本建築界の関心が示されている。
- ・調査の目的は、先行する伊東忠太らの北京宮殿調査に関連し、建造予定であった迎賓館の設計参考調査であり、大江新太郎に課せられた装飾課題からも明らかである。
- ・調査対象となった建築類型は城郭、宮殿、陵墓、仏寺・塔（チベット仏教を含む）、モスク、住宅、商店、官署など多様であり、都市は大連、遼陽、奉天（現瀋陽）、開原、鉄嶺など広範囲に及ぶ。
- ・調査対象のうち、チベット仏教寺院、モスクは、満洲地域に於いて、その地域性を表す重要な建築類型である。
- ・寺院などでは、木造の柱、梁のフレームに、煉瓦、日干し煉瓦、石などで壁を組込む混合構造である。
- ・大江新太郎の建築装飾調査では、建築彩画研究に多くの知見を提供した。
- ・調査成果として、ガラス乾板写真、実測図、装飾図、スケッチが残されている。
- ・本調査は、伊東忠太と大江新太郎のその後の設計活動に大きな影響を及ぼしている。

最近の業績

- [1] 奥富利幸・包慕萍「大江新太郎の瀋陽故宮調査とその方法」第13次中国近代建築史学術年會報告集『中国近代建築研究と保護』2012年
 - [2] 奥富利幸「大江新太郎の満洲調査—近代日本の建築の将来を見据えて」風媒社、2012年
 - [3] 奥富利幸「20世紀初頭にアメリカで建築を学んだ日本人留学生について：カリフォルニア大学を中心に」日本建築学会大会学術講演梗概集、2012年
- 科研基盤研究(C)「明治期日本建築界の満洲調査における歴史的及び現代的意味」2011-2013年